＊＊

静内ケアセンターだより5月25日号

認知症高齢者GH・ケア付き高齢者住宅・デイサービス・訪問介護・患者輸送・文責下川孝志

＊＊

平穏死の講演、共感の連続！

最近の私が聞いた講演の中で最高だね！医者として自分がやってきた事の反省に基づく現在の取り組み・・医者はプライドが高く自分の過ちさえ認めない人種である。長尾先生は反省に基づき、地域医療や平穏死に真正面から向き合っている。昨夜聞けた人は「え？こんな医者がいるんだ、でもそうだよね・・」と共感したことであろう。さらに言うなら私達が取り組んでいる"看取り"が認められたようで嬉しくなったし、長尾先生と同じような考えの富部先生が新ひだか町にはおり、他の医師達も自分の通院患者の訪問診療くらいは何人もしている。町立病院の先生までもが「この患者は私が診ます（訪問診療）」ときた。

我がグループホーム昨年の7人はみなさん平穏死、変な長男の登場もなくモメル事もなく、生きてるよりいい表情で旅立った。平均年齢が80歳後半、要介護度3，5、認知症だけでなく様々な合併症を持つ人達。でも苦しむことなく自然体で・・・延命治療なんて無し、直前まで口から食べ口から水分を摂取していた。体が求める分だけ・・・・・

歓目な家族が「先生できるだけ生かして・・」と求められれば、多くの医師は延命治療を行なっている。そんな病院から退院できる人はいなく、みな病院で死んで行く。

（故）山田．茂先生の「病院で死なないことこそが、幸せな死でないだろうか」に共感し私達は実践している。

長尾先生は100％胃ろうを否定しているのではなく、生きるための楽しい胃ろうはあるとも語る。終末期における無駄な高栄養補給や点滴に意味が無いと語っているのである。患者が喋られる状態なら「そんなもんいらん」と何人も言うであろう。周りの家族の勝手な思い判断で苦しみ痛みを押し付けられているのです。

私も、もう13年の経験の中で60人を越える看取りを行なってきたが、高齢の人達は死の受け入れ（死の準備）をちゃんとなされていた。まるで自分の死を悟っているかのように・・・我がホームの身寄りの無い何人かは「社長・・最期は頼むよ」とまかされているが延命治療はしないつもりである。

みんなで看取り正面玄関から拍手で送りだす。今後も何人かはホームでの葬儀となろう。昨夜の長尾先生の言葉が今も頭に残る。先生には交流会にも参加していただいた。節酒～禁酒も来月からになりそうである。だって良い仲間との酒はうまいんだよな！

利益相反問題

医学会「臨床関与」を指弾